

P-1.

簡便な外傷歯の固定法
ーラバーダム防湿下での接着ー

○井槌 浩雄, *渡辺 善久

いづち小児歯科, *きららデンタルクリニック

【はじめに】

当院では、約18年前より外傷歯の固定法として、ディスプレイの注射筒を用いた搾り出しによるレジン・シーネを作成し、ラバーダム防湿下で接着を行なっている。本法は、日常の臨床において、緊急を要する外傷患者を術者サイドがゆとりを持って対応できる容易な術式であると考えている。今回は、その一例として、変位を伴う症例の処置手順を報告する。

【症例】

患者：2歳3ヶ月 女児

現症および口腔内所見：受傷後約1日を経過、前歯を使って食事が取れない状態。Aは口蓋側変位、Bは中等度動揺、患歯周囲歯肉の腫脹および変色を認める。

【手順および経過】

レジン・シーネ作成：速硬性超硬石膏による模型作成⇒ワックスによる変位修正⇒レジン餅を注射筒に装填⇒搾り出し⇒研磨

レジン・シーネ接着：変位歯周囲に浸酔⇒ラバーダム防湿⇒変位歯の整復⇒スーパーボンドにて接着⇒ラバーダム除去

レジン・シーネ除去：フィッシャーバーにて割合（1ヶ月後）⇒除去⇒動揺修復確認

【考察】

搾り出しによるレジン・シーネは、熟練を必要とせず、極めて短時間に作成可能である。ラバーダム防湿下であれば、完全に出血や唾液を排除が可能となるため、非協力児の下顎舌側に接着を行なうことも容易となる。動揺歯にラバーダムを行なうことは、乱暴だと思われがちであるが、処置中の歯牙の脱落は皆無であり、ラバーダムを行なう意義は非常に大きいと考える。

P-2.

小児の口腔軟組織に発生した腫瘍性病変の2症例

森 奈千子

森歯科小児歯科医院（熊本県山鹿市）

【緒言】小児の口腔内軟組織に発生した腫瘍性病変2例（舌下型ガマ腫、頬粘膜線維腫）について報告する。

【症例1】初診、平成17年11月4日。4歳9か月女児。口腔内右側舌下にガマ腫が発生し、他医院にて2回開窓術を施すが、再発を繰り返したため、当医院を紹介された。福歯大附属病院と連携にて舌下腺腺体一部切除するも再発。右側下顎第二乳臼歯舌側辺縁隆線を研磨後、再発しなかった。

【症例2】初診、平成18年1月5日。8歳6か月女児。前年10月頃から右側頬粘膜を咬むうちに頬粘膜に示指等大の有茎性腫瘍が発生。大学附属病院と連携にて腫瘍を摘出後、病理組織検査にて線維腫と確定。再発はなかった。

【考察】症例1；ガマ腫の一般的治療法として開窓術が挙げられるが、再発しやすく、全摘出が行われることもある。成人で咬合性外傷によりガマ腫が発生した経験から、今回咬耗により鋭縁化した辺縁を研磨したことで、唾液腺開口部の炎症を抑え、再発しなくなったと考えられる。

症例2；口腔軟組織に見られる線維腫の多くは、炎症性ないし反応性の線維性組織の過形成である。本症例は、2、3か月の間、頬粘膜を咬むようになり、腫瘍が徐々に増大した。良性の線維腫であるとの確定診断が得られたが、患児とその家族に対し、不用意な不安を与える事なく、確定診断後、予後を観察することが重要であると考えられる。